

E  
ラ  
ン  
ク  
の  
薬くす師し  
3

### サタル

キヤルの亡き父。  
王宮の医術士局長を  
務めていた。

### エリー

キヤルの亡き母。  
貴重な魔法書を  
所有していた。

### マルク

伯爵家の当主。  
魔法書を盗まれたと  
主張している  
が――?

### リリー

伯爵家の令嬢。  
マルクの養女で、  
わがままな性格。

### サシャ

オーレリアンの部下。  
常にこき使われている。

### オーレリアン

王宮の筆頭魔法使い。  
極度の自信家で  
ナルシスト。

### カイド

Sランクの魔法剣士。  
キヤルに命を救われて以来、  
行動を共にしており、  
今は恋人でもある。

### キヤル

元・落ちこぼれ薬師。  
父譲りの知識と  
特殊なスキルを持ち、カイドの  
相棒として充実した日々を  
送っている。

登場人物  
紹介

目次

Eランクの薬師3	7
プロローグ	8
第一章 犯罪者の娘	19
第二章 真相	134
エピソード	255
二十年前の恋のお話	263

E  
ラ  
ン  
ク  
の  
薬くす  
師し  
3

## プロローグ

太陽が輝き、心地いい風が流れる。

キヤル・アメンダは、葉草園に咲き誇る花々を見て笑みを深めた。この調子でいけば、暑さが薄らいで涼しくなってきた頃に、花たちは実になる。

このピンクの花はカスターリンという植物で、葉は苦く虫さえも寄ってこないで、防虫剤として使われることが多い。

しかし、実はとてもいい香りがするのだ。殻をむいて中の柔らかな果肉を取り出し、丁寧に灰汁を抜けば、紅茶にしたりお菓子の香りづけに使ったり、乾燥させればポプリにもなる。

とても使い勝手のいい植物だった。

そんなカスターリンを横目で見ながら、近くに植えてあるハーブを採集する。

今日は少し暑い。ミントティーを淹れよう。

キヤルは台所でお茶の準備を済ませ、トレーニング以外は書齋にこもりきりになっているパートナーのもとに運んだ。

キヤルは、冒険者として活動している。

元々はここ、辺境の町コロロンで薬屋をする普通の女の子だった。

だがグランという自称勇者の青年に魅了の術をかけられて、冒険者として旅に出ることになった。グランのサポート役として、ひどい扱いを受けながらも、彼のために必死で薬を作っていた。

それなのに、キヤルのランクが上がらないことに苛立ち、グランはキヤルを捨てた。

そこで助けてくれたのが、今のパートナーであるカイド・リーティアスだ。

彼は、冒険者の中でも最高ランクであるSランクの魔法剣士。

対してキヤルは、最弱とされるEランクの薬師だった。

釣り合うはずもないのに、カイドはキヤルと一緒に行動し、彼女の力を認めてくれた。キヤルはカイドの力を借りながら、Bランクにまでなることができたのだ。

その後、彼と共に国からの依頼で、ある違法薬物の流通経路を調べた。マムシと呼ばれる、依存性と副作用のある非常に厄介な薬だった。その原料となるコダマという植物を法律で規制し、マムシの流通も止めることができた。

今は、精力剤としてのコダマの薬効をどうにか生かせないかと、キヤルが改良を加えているところだ。

そして、カイドとはいえば、キヤルの父の書齋にこもりきりになっている。

キヤルの父であるサタル・アメンダは、すでに亡くなっているが、キヤルが幼い頃は王城で働いていた。

しかも医術士局長という高い地位についていたらしい。

カイドだけでなく、この国の筆頭魔法使いであるオーレリアン・シャルパンティでさえも、サタルの書齋に並んでいる本たちを宝の山だと称する。

コココンツ。

軽くノックをして扉を開け、キヤルはお茶とお菓子を載せたワゴンを室内に入れた。

「カイドー。休憩しよう」

「ああ、ありがとう」

カイドは読んでいた本から顔を上げて、少し眩しそうに目を細める。

先日まで、この本だらけの狭い書齋では、男三人が窮屈そうに過ごしていた。違法薬物の取り締まりの後、キヤルの家までくつついてきたオーレリアンと、その従者であるサシャも、ここで本を読んでいたのだ。

だが先週、筆頭魔法使いが城にいないことに困り切った官僚たちが、王に泣きついたらしい。それを受けて、王が戻ってこいと命令を出したのだ。

オーレリアンは渋りながらも、ようやく王都に帰っていった。

仕事を放棄して、王に命令まで出させるって、筆頭魔法使いとしてどうなのだろうか。裏を返せば、それだけ必要とされているということだけど、この国は大丈夫なのだろうか。

ともかく、そんなこんなでカイドと二人だけの、のんびりした生活になって一週間。

そうは言っても、彼は書齋にこもりきりで、キヤルも薬の研究ばかりなので、オーレリアンたち

がいる時と、あまり変わりはないのだが。

さつきキヤルの声に顔を上げたカイドは、また本に視線を戻してしまっている。

「何か面白いがあった？」

キヤルはテーブルに茶器を並べながら、父の机で本を読むカイドに声をかける。

いつもだったらキヤルがお茶を運んでくると、すぐに本を閉じて脇に置くカイドだが、今日は本を手放そうとしない。

あと少しだけと言うように、本を読み続けていた。

「……ああ。ごめん。キリが良いところまで読ませてくれ」

「うん」

キヤルは素直に頷いた。気に入った本を読み始めると、なかなか区切りがつかないのはキヤルだっただけだ。

カイドの手の中にあるのは、キヤルの亡き母が遺した魔法書だった。キヤルにとってはあまり興味がないジャンルなので、どんな内容かは分からない。

キヤルは一人テーブルについて、ミントティーを口に運ぶ。爽やかな香りが口いっぱい広がった。

本に没頭するカイドを見て微笑む。母の本も彼に読んでもらえて嬉しいだろう。キヤルにはほとんど魔力がなく、魔法書は理解できないので、ほぼ開いたことさえない。

父は薬師だったが、母は魔法使いだった。

魔法使いと言っても、他の人より少し魔力が強いというだけで、仕事にしていたわけではないうだけれど。少なくともキヤルは、母が仕事をしているところを見たことがなかった。

母の名前は、エリー・アメンダ。旧姓は知らない。

結婚する前のことは『忘れちゃった』と言って、教えてくれなかったのだ。

その母が持っていた魔法書が、カイドの興味を惹きつけてやまないらしい。父が書いた本も読みふけていたが、ここまで一生懸命なのは珍しい。余程気に入ったのだろう。

魔法書を読みながら、小さく手を動かしている様子が可愛い。呪文でも覚えているのかもしれない。

開け放った窓からは、爽やかな風が舞い込んできて、カイドの短い髪を揺らす。

こんなふうに穏やかで幸せな日々を、ずっと望んでいた。

キヤルは目を閉じて、この空気を楽しんだ。

しばらく待ったが、カイドは一向に読書をやめない。

ポットの中のお湯も、入れ替えなければいけないだろう。

そもそもお茶は必要なかったのかもしれないと思いつつながら、キヤルは念のために確認を取る。

「カイド。クッキーいらない？ もう片付けちゃうよ」

普段はキヤルよりもずっと多く食べるのに、今は本の方がいいようだ。このクッキーは明日のおやつに残しておこう。

そう思って、クッキーをお皿から保存容器に移そうとした途端、

「え？ それはいる」

カイドが、ぱつと顔を上げて立ち上がる。

お茶とクッキーが片付けられようとしていることに、ようやく気が付いたようで、彼はテーブルの傍までやってくる。

「お茶飲む？ お湯、入れ替えようか？」

キヤルはお湯を沸かしてこようと、椅子から立ち上がる。すると、カイドはその椅子に滑り込むようにして座った。

お茶が入ったカップを持ち上げ、別の手でキヤルを捕まえる。

「いや、これがいい」

そう言って、お茶を飲むのはいいのだけれど……

キヤルの腰を抱いて、膝の上に座らせるのはどうなのか。

「カイド！ お茶がこぼれるでしょ！」

「キヤルが暴れなければこぼれない」

なんて言い草だ。まるでキヤルが悪いみたいじゃないか。

キヤルを膝にのせて、美味しそうにクッキーを食べるカイド。キヤルは振り向いて睨み付けるけれど、本当に怒っているわけではないことを、彼は知っている。

カイドは幸せそうに目を細めて、キヤルのこめかみにキスをした。

「美味しい」

そう言っただけでつこりと笑えば、キヤルがおとなしくカイドの胸に頭を預けることも、彼は知っているのだ。

「奥の方に、古びた箱があつてな。その中が魔法書だらけだった」

カイドがそう教えてくれた。今読んでいるものも、その中に入っていたらしい。

父の書齋は雑然としている。本人は何がどこにあるか分かつていたようだが、キヤルは興味があるもの以外は全く分からなかった。

見ただけでは判別できない薬品や、生物のホルマリン漬けなども置いてあつて、価値があるものかどうかはまいち分からない。

さらには様々な日用品までもが雑多に置いてあつて、片付けるのに苦労しそうな部屋なのだ。

父の死後、キヤルは冒険者として旅に出た。そして戻ってきたと思つたら、すぐにまたカイドと旅に出ていたのだ。

だからこの部屋は、父が生きていた頃とほぼ変わらない状態だ。いろいろ落ち着いてから片付けようと思つていたので、奥の方に魔法書の箱があることすら知らなかった。

書齋の奥、しかも上に他の本などが置かれていたら、箱があることにも気が付かない。

もし箱を見つけたとしても、中に本が入っているとは思わなかっただろう。父はあまり物事に頓着する人ではなかったたので、野菜を入れていた木箱が使われていたりする。

さすがに、食べ物が中で腐っていたりはしない……と思いたい。

「魔法書だったら、お母さんのだよ」

母は魔法を頻繁に使つていたわけではないが、時々ふらりと薬草採集に行つてしまう父と連絡を取るために使つているのは、キヤルも見ることがある。

けれど持つていた魔法書は『もう読まないのよね』と言つて、父の書齋に押し込んでいた。

「この魔法書もそうだが、どれも非常に高度な魔法が記されている」

そう言いながら、クッキーの食べかすが付いた指をべろりと舐めて、その指をくるりと回すカイド。

彼が聞き取れない言葉を発すると、指の軌跡に光の輪が現れた。

キラキラと輝いて、すぐに消えるかと思つたら、その場で回り続けている。

「例えばこれは、伝言の魔法だ。メッセージを入れておけば、ここに誰かが来た時、この輪に触れるとメッセージを受け取ることができる」

「へええ」

これがどれだけ高度なのかは分からないが、光の輪が綺麗なので、キヤルは思わず手を伸ばす。

「メッセージを入れていないから、ただの光だぞ」

カイドの言う通り、その輪に触れても、ほんのりと指先が温かくなるだけで、光は消えてしまった。

「メッセージを伝えた後はこうやって消える。伝える人数を増やしたり、すぐに消えないようにし



たりもできるようだが、条件を増やせば増やすほど、呪文が面倒くさくなる」

光の輪があった場所を名残惜しく思いながら見ていると、キヤルの頭の上で笑う声がした。

「気に入ったのか？ キヤルが愛の言葉を入れてくれるなら、ほぼ永遠に回り続ける光を作るが」  
「……………っ！」

どうやって入れるの？ なんて聞いた日には、無理矢理にでも入れさせられそうだ。

しかも、ほぼ永遠に回り続ける？ 作ったら最後、毎日メツセージを聞かれそうで、絶対に嫌だ。キヤルは、赤くなつてしまったのであるう顔を隠すために、目の前の茶器を慌てて片付け始める。

「じゃ、じゃあ、ゆつくりしてて！ 私ほこれ片付けちゃうから！」

カイドの膝からひよいっと飛び降りて、彼の顔を見ないままトレーをワゴンに下げた。

背後から「してくれないのか？」という不満げな声が聞こえたような気がしたが……いいや、決して聞こえていない。

部屋を出る時に、ちらりと振り返ると、彼はもう本に視線を戻していた。

何度も聞き返すことができる伝言の魔法に、自分の声を入れるなんて、絶対に無理だ。

でも、例えばだけれど、カイドが愛の言葉を入れてくれたとしたら——

そんなことを考えて、さらに顔が熱くなる。

カイドは周りの人には堂々と『恋人宣言』するものの、キヤルに向かって『好き』だの『愛してる』だの言うことはほばない。抱きしめたりキスしたりはするのに、そういう言葉を発するのは恥ずかしがる、妙に照れ屋などところがあるのだ。

だから、彼が入れた愛の言葉を何度も聞けるだなんて、そんな、そんなものがあつたら……  
「毎日聞いちゃう」

自分で考えたことに自分で驚き、キヤルはうずくまつて一人身悶えたのだった。

ティータイムの後は、妙に気恥ずかしくて書斎に入れなかつたが、もう夕食の時間だ。

キヤルは大きく深呼吸をして、書斎の扉を開く。

「カイド、ご飯の準備ができたよ」

そう呼びかけて、彼の表情の険しさに思わず足を止める。

机の上には、見たことがない本が山積みになっていた。

背表紙に金色の文字が連なっている。その下には、巻数を表す数字と思しきものが、一冊ごとに振つてある。

キヤルには読めない文字……多分、魔法使いだけが使う魔法語だろう。

その横にも、辞書のような分厚い本が数冊積み重なっていた。

魔法剣士であるカイドにとつては嬉しいはずの本が山になっているのに、彼の表情は嬉しさとは対極のものだった。

「これらは……希少価値のあるものだ」

カイドがキヤルの方を見て言う。

「何か……悪いものなの？」

彼の表情を見て、キヤルは強い不安を感じる。

どうして希少価値のある魔法書だと言われて、こんなに不安になるのだろう。

「分らない」

カイドは見ていた本を机の上に置いて、さらに別の本を箱から取り出す。

「キヤル、君のお母さんは、高位の魔法使いだったのか？」

キヤルは、両手をぎゅつと握りしめて……悩みながらも、首を横に振った。  
こんなことで嘘を吐いても仕方がない。

ただ、母が高位の魔法使いであつたら良かったのにと、なぜかそう思ったのだ。

カイドも答えが分かつていて聞いたのだろう。アメンダ元医師士局長の妻が、名のある魔法使いでなかつたということは、彼も知っているはずだ。

「これらの書物がどれだけ貴重なものは、俺でも判断がつかない。ただ……個人の蔵書としては、あまりにも大きな魔法が多く記されている」

カイドがたまらずというように、大きなため息を吐いた。

「オーレリアンに報告する」

彼の言葉に、湧き上がってくる不安を抑え込んで、キヤルは小さく頷いた。

## 第一章 犯罪者の娘

### 1

魔法で作られた青い鳥が、カイドの報告書を携えて飛び立った次の日。

唐突に豪華な鏡が書斎の真ん中に出現した。

『やあ！ 久しぶりだね』

見覚えのある魔法使いが鏡の中から、満面の笑みでこちらを見返している。

キヤルは突然のことに驚いて固まるが、カイドは反応したら負けだと思つているのか、視線さえも鏡に向けることはしない。

『ああ、感激のあまり言葉も出ないのだね。大丈夫、分かっているよ。僕も自分の美しさは、そろそろ罪悪の部類に入るのはないかと日々恐れているところさ。そんな僕の美しさを再びこうして見ることができ、そこに望外の喜びを見出しているというわけだろう？ ふふつ。安心してほしい。僕は——』

「キヤル、散歩に行こう」

いつまでも続きそうなオーレリアンの口上を無視して、カイドは鏡に背を向ける。

『待ちたまえ！ 今のは挨拶だよ？ しつかりと聞いてくれなくては！ 本題はこの後なんだ』

「本題が始まったら教えてくれ」

カイドは取りつく島もない。

オーレリアンは嘆かわしいというように両手を大きく広げる。

『なんてせっかちさんなんだ。僕の言葉が聞けるだけで眩暈を起す人までいるというのに、君は——』

キヤルは何も反応できずにいたが、カイドに背中を押されて部屋の外に向かった。

『いや、出ていかないでくれ！ 王都とコロンとの距離で魔法鏡を出すのは難しい！ 別の場所でも一度展開するのはさすがに疲れるんだ！』

というか、国の端と端で映像付きの通信を、こちらの補助もなくてできる場所はさすがと言わざるを得ない。

別に映像付きじゃなくてもいいとか、鏡のような無駄な小道具は必要ないとか、いろいろ突っ込みどころ満載ではあるけれど。

「お前が余計な話ばかりするからだろう」

『余計なことは一言も話していないよ！』

いや、余計なことしか言っただけだと思っただけだ。脳内で突っ込みながら、キヤルはオーレリアンを振り返る。

彼は、キヤルとカイドが自分の方を向いたことを確認して、ふっと笑う。

『では、本題に入ろうではないか』

黒く真っ直ぐな髪を後ろに払って斜めに構える。この角度が良いとか、きつと思っただけだろう。

今度はキヤルもカイドと同じく、反応したら負けだと思っただけ。

二人の反応がないのを残念そうにしながら、オーレリアンは書類の束を示す。

『カイドから、魔法書についての報告を受けた。本の題名と内容の抜粋も確認し、調査した結果、これらの書物が盗品であることが発覚した』

さっきまでくだらないことを長々としゃべっていた人が、突然、真面目なことを簡潔に話すと、何を言っているのか分からなくなるものらしい。

彼が話した内容を、キヤルは理解できなかった。

「全部か」

カイドはオーレリアンが言うことを、ある程度予想していたのか、すぐに質問を返す。

『君から送られてきた書物の一覧と、盗難届を照合した。書名は全て一致している』

オーレリアンは眉間にしわを寄せ、ちらりとキヤルを見た。

『アルスターク伯爵という人が、盗まれたと言っただけで被害届を出していた本なのだ。もう二十年前になるかな。それだけの年月をかけて探して続けたものだ。非常に貴重な書物と言える』

その貴重な書物が、キヤルの家の書斎の隅で、埃をかぶったまま放っておかれていた。いや、それ以上に信じられないのは——

母の遺品が、盗品……？

『現物を確認させてくれ』

オーレリアンの言葉を聞いて、カイドがキヤルに視線を向ける。

どうすればいいか分からない。でも、ここで拒否することはできないと、キヤルは小さく頷いた。カイドが木箱に入った本たちを持ってくる。箱は埃にまみれて白くなってしまっていた。

その中から、本を一冊ずつ取り出し、テーブルに並べていく。

オーレリアンの視線が、テーブルの上の本たちに注がれる。新しい本が置かれるごとに、その目がどンドン輝いていくのが分かった。

『一体どこにあったんだい？ それらの本を、僕がそちらにいる間に見つけられなかったことは、人生最大の失敗だよ！ 僕の失敗だと言っているんだ。この意味が分かるかい？ この僕が、失敗したということは、世界の損失だと言っているいい！』

世界の損失、ちつさいな！

キヤルが脳内で突っ込んだ時、また関係ない口上を述べそうだったオーレリアンを、カイドが止める。

「それで？ どうしろと言うんだ？」

低い声で言い、強く、オーレリアンを見据えた。

オーレリアンは小さく肩をすくめる。

『それらは盗品だ。それを所有していたキヤル・アメンダ。君に出頭命令が出ている』

急に厳しい声で言われて、キヤルの頭は真っ白になった。

出頭命令って……なんだっけ？

「キヤルが、これらを盗んだと？」

カイドの言葉に、キヤルの体が意思とは関係なくびくりと震えた。

彼の背中が目の前にある。いつの間にか、キヤルの姿がオーレリアンから見えないように、カイドが立ち位置を変えてくれていた。

『そうは言っていない。そもそも、二十年以上前に盗まれたものだ。アメンダ嬢が犯人などとはさすがに思っていないよ』

後半の言葉は、キヤルに投げかけられたものだろう。

声音に少しだけ柔らかさが加わっていた。

『アルスターク伯爵からは、犯人と思しき人物の名を聞いている。今、そのエリーという名の女性を探しているところで……』

「母、です……」

エリーという人物ならば、知っている。エリー・アメンダ。母の名前だ。

だがキヤルは、母が昔どこで何をしたのかは知らない。

『なんだって？ ……おい、アメンダ元医師士局長の妻に関する記録を持ってこい！ ——ない？ なぜだ！』

鏡の向こうで、オーレリアンが誰かと会話をしている。近くに部下がいて、資料を探させている

のだろうか。

「母の名前はエリーでした。でも……」

エリーなんて、ごくありふれた名前だ。この国には何万人ものエリーがいるだろう。

しかし、盗まれた書物を持っていたのはエリー。そしてアルスターク伯爵が犯人だと言っている女性の名前もエリー。これはどう考えても偶然ではない。

『なんと、アメンダ元医師士局長の妻が犯人だったとは。彼のような大物に寄生していたから見つからなかったのか』

悪意のこもった言葉に、怒りの感情が湧き上がる。

「寄生なんてしていません。父と母は、仲が良い夫婦でした。それに、犯人でもありません。母は何かを盗むような人ではありません」

言われたことを全て否定したくて、キヤルは思いつくままに言った。

オーレリアンがわざとらしいほど優しい顔を作る。

『もちろんそうだろう！ 家族なら大体そう言うものだよ。そんなことをするわけがないってね。

素晴らしい家族愛だと思っようよ』

オーレリアンはキヤルをいたわるような声で言う。

しかし彼は、キヤルの言葉を真摯しんしんに受け止める気などないのだ。

『ただ、僕たちはそれらを正当な持ち主に返還しなければならぬ。そのためにも、犯人は捕まえないなければならない。……ああ、すでに亡くなっているのだったね。では残念だが、書物だけを返し

てもらおうか』

正当な持ち主……

テーブルの上の本を、キヤルはぼんやりと眺めた。

これらの本が家にあつたことを、キヤルは知らなかった。書齋すみの隅すみに置かれて、埃ほこりをかぶっていた本だ。

だけど、この部屋にあるものは全て、父と母の遺品だ。二人が大切にしていたもの全てが、この部屋には詰まっている。

彼らの娘であるキヤルの他に、正当な持ち主がいるなんて――

キヤルは目の前にあるカイドの背中に、ぎゅうつと抱き付いた。

こうしていないと、今にも叫び出してしまいそうだ。

背中に回ってきたカイドの手が、キヤルの手を握る。その手を、キヤルも力いっぱい握り返した。「これほどの魔法書となると、本自身が力を持っていたりするのでは？」

突然、カイドが別の話題を切り出した。

オーレリアンは、すでに調査済みだとばかりに大きく頷うなずく。

『それはないようだね。そもそも、アルスターク伯爵が個人で所有していたものだ』

オーレリアンはキヤルたちを安心させるように、にっこりと微笑む。

『君は、その本に呪いなどがかかかっていて、所持している人に悪影響があるのではないかと考えたようだが、その心配はない。安心して王都へ持ってきてくれたまえ！』

王都へ。

これらの本を持って、また行かなければならないのか。今度は旅の成果を報告するためではなく、キヤルが取り調べを受けて、母の本を取り上げられるために。

「だったら、もういい。危険なものでないと分かれば、それだけでいい」  
そう言つて、カイドはくるりと鏡に背を向ける。

その背中にしがみついていたキヤルは、突然の動きについていけず、繋がれていた手も離してしまった。でも、それに驚く前に、ひよいと抱き上げられる。

『それだけでいい？ 何を言っているんだ。しっかりと王都へ届けてくれよ？』

カイドの肩越しに、オーレリアンの慌てた顔が見える。

カイドは心底面倒くさそうに彼を振り返つて、こう言い放つた。

「そもそも、盗品かどうか調べて欲しいとは言っていない。これが危険なものかどうかを判定して欲しいと、そう連絡しただろう？」

別の魔法使いに頼めばよかつた……なんて、小さく呟くのが聞こえた。

その声もしっかり拾つたのだろう。オーレリアンは大きな声をあげる。

『僕以上に魔法書に詳しい人間が、この世界にいるわけがないだろう！』

「だから、仕方なくお前に聞いたんだろ」

教えてもらう側の態度ではないが、カイドはうんざりとした様子を隠さない。

「キヤルの安全にかかわることだったから、知識だけは持つていそうなお前に聞いた。危険がないなら、それ以上の情報は必要ない」

『必要ないわけないだろう！ それは、エリー・アメンダが盗んだものだ！』

「盗んでない！」

オーレリアンの声に対抗するように、キヤルも大きな声を出してしまう。

目に涙がにじむのが分かつた。

ぜえはあと肩で息をするキヤルに、オーレリアンは大きなため息を吐く。

たつたそれだけのことが、気に障つて仕方がない。彼の大げさな仕草や物言いには、もう慣れたと思つていたのに。

カイドがキヤルを抱き上げたまま、彼女の背中を優しく何度も撫でる。

落ち着けと言われているように感じて、キヤルは大きく深呼吸をした。

「母が犯人だと決めつけずに、ちゃんと調査してください」

声は震えてしまったが、キヤルはオーレリアンを真っ直ぐに見つめて言った。

『調査だつて？ なんのために？ はつきりと言わせてもらうが、僕は忙しいのだよ』

「なんのためつて……」

当然の要求だろう。盗まれたと主張している方の言い分だけ聞いて、もうこの世におらず何も弁明できない母を犯人だと決めつける。そんなの、不公平だ。

キヤルは呆然としてしまつて、すぐに反論できなかつた。

そのせいで、オーレリアンを調子に乗せてしまったのだ。

『いいかい？ アメンダ嬢。罪は罪だと認めなければ。君の母エリーが犯人であることは確かなんだ』

それが間違っているかもしれないと、キヤルは言っているのに。もしも、もしも……結果として母が盗んだような形になっていたとしても、それには理由があるはずだ。調べもせずに母のものを渡せと言われて、渡すわけにはいかない。

「母は、魔力がほとんどありませんでした。魔法書を盗んで何になるでしょうか」  
大した魔力もないのに貴重な魔法書を持つなんて、宝の持ち腐れだ。

そもそもキヤルは、母が魔法書を読んでいるのを見たことがない。

『金銭目的だろう。魔法書は高額で売買されているからね！ しかし、この書物の希少さを知り、売ったら足がつくことを恐れたのさ』

「お金目的だなんて……！ 両親は、お金に困ってなんかいなかった！」

父は、王都からコロンに移り住んだ後、薬屋を経営していた。

華やかな生活をしてきたわけではないけれど、必要なものは一通りそろっていた。

何かを盗むほどお金に困ってなどいかなかったはずだ。

『欲深い人というのは、どこにでもいるものだね！ しかし、それを見抜けなかったことは罪ではないのだよ』

ひどい言い草だ。オーレリアンの中で、エリーはどんな極悪人になっているのだろうか。

彼は元医師士局長である父を尊敬しているはずだ。だがその父のことも、キヤルのことも、エリーに騙だまされていた可哀想な人間だと思っているらしい。

キヤルを優しく呼ぶ、母の声を思い出す。

いつも笑っていて、キヤルが何かに失敗しても、どうすればできるようになるのかを教えてください。

けれどキヤルが悪いことをした時は、父よりも怖くて。キヤルが母に怒られている時、その迫力に父まで固まってしまっていることがよくあった。

『ただし、アメンダ嬢。君には事情を聞かなければならない。でも僕は寛大だからね。書物が戻ってきさえすれば、盗品を所有していた事実を罪に問うことはしないよ！』

——それを、寛大な措置だと言うのか。

母を罪人だと決めつけて。再調査を求めても必要ないと突っぱねて。騙だまされていた君は悪くないなどと言って、キヤルを傷つけることが。

全身が怒りに震える。

キヤルはこのまま何もできず、母を罪人として扱うオーレリアンに、彼女の遺品を渡さなければならぬのか——

その時突然、鏡の向こうで、風が巻き起こった。

『え、ちよ……待って！ カイド、何をするんだっ！ だから、勝手に僕の魔力を使わないでくれるかな！』

どんがらがつしゃんと、盛大な音が聞こえた。恐らくカイドがなんらかの攻撃を加えたのだろう。彼は平気そうな顔をしているが、キヤルを抱く腕に力がこもっているので、それなりに魔力を必要とすることなのだと分かる。

「用は終わった」

カイドは吐き捨てるように言って、ぐるりと肩を回した。

『終わっていないだろ！ その本、王都に持ってきてくれよ！』——僕も実物を見たいんだ！』

オーレリアンの慌てた表情と本音を最後に、魔法鏡が消える。

以前も同じような状況になったことがあるけれど、カイドは魔法鏡を消すことまではしなかった……というか、できなかったと思う。

キヤルが目を瞬か<sup>また</sup>せていると、カイドが大きく息を吐いた。

「よし、あいつも疲れているだろうから、しばらくは静かだ。休憩にしよう」

いずれまた鏡を使つて連絡してくるだろうけど。

そう言いながら、カイドはキヤルの頬<sup>ほ</sup>にキスをする。

「ひゃっ!? いきなり何するの!」

「恋人にキスするのに、いきなり何もないだろう。常時オツケーだ」

そんなはずないでしょ! 心の準備が!

そんな文句も、彼の口の中に吸い込まれてしまう。

キヤルが真っ赤になっているのを、カイドは嬉しそうに見つめた。

「大丈夫。お前の大切なものは、誰にも奪わせない」

そう言って、もう一度、唇を重ねる。

母のものであつた魔法書を奪われることを、キヤルが怖がっていると、カイドは知っているのだ。そして、それが盗品だろうがなかるうが、関係ないとも思っている。

キヤルは感謝の気持ちを込めて、カイドに抱き付く腕に力を込めた。

## 2

オーレリアンから連絡があつた日から、二日が経つた。

あれ以来、彼からはなんの連絡もない。

魔法鏡を使うのは、キヤルが思つていた以上に疲れるのかもしれない。

そんなふう<sup>のん</sup>に呑気に考えていたキヤルとは違い、カイドはあの日の夜からいろいろと準備をしていたらしい。

夕食の時、彼が真面目な顔で言う。

「キヤル、旅の準備をしておけ」

「え……? どうして? どこに行くの?」

本意ではないという彼の表情を見て、キヤルは不安になる。



やはり、行かなくてはならないのだろうか。

「王都に、行くの？」

行ってしまえば、どうなるのだろうか。キヤルが盗んだものではないとはいえ、盗品を持っていたのは事実だ。母の本は取り上げられ、キヤルは……？

どうなるにせよ、国からの命令であれば拒否はできないのだろう。

そう思って俯うつむいてしまったキヤルに、慌あわてたような声がかかる。

「違う。逆だ。王都には何がなんでも行かない」

キヤルが驚いて顔を上げると、カイドは心配そうにこちらを覗のぞき込んでいた。

「言葉が足りなかつたな。悪い。オーレリアンからこれだけ長く連絡がないのは、多分、直接こっちに向かっているんだらう。だから逃げなきゃならない」

逃げる……って。

出頭命令が出ているのに無視しようとしていたキヤルも大概だけれど、カイドは無視するどころか逃げようとしているのか。

「できれば、このままここで暮らしていたかったが、あいつから二日も連絡がないのはおかしい。

恐らく、もう出立している」

チツと舌打ちをして、王都の方角を睨にらむように見るカイド。

「通信だけでどうにかしたかったが、向こうは全くその気がないようだ。——捕とらまっていたまるか」  
国の筆頭魔術師が直接キヤルを捕らえに来ようとしている。しかしカイドは、それを見越して逃

げるという。

……それは、明らかに犯罪者の仲間入りじゃないか？

キヤルの内心を察したのか、カイドが微笑ほほえんで言った。

「大丈夫だ。俺はキヤルさえいれば、後はわりかしどうでもいい」

「いやいやいや」

それはさすがに嫌だ。逃亡生活になると思うと、簡単には割り切れない。

「あいつと部下全員を返り討ちにしてもいいが、それだとコロンの町が大変なことになりそうだし」

「うん、そこは大事だね！」

カイドが本気で魔法をぶっ放したらどうなるかは、山猿やまざるという魔物と戦った時に経験済みだ。

あんなの、町中まちなかでは絶対にやめて欲しい。その場合、キヤルの家が消失することは確実だろう。

「後のことは後で考えるから、とりあえず、旅の準備をしてくれ」

そう言われると、キヤルはもう頷うなづくしかなかった。

盗品だと言われた母の蔵書は、一旦カイドの空間魔法でしまい込む。

本当は父の蔵書も持っていきたくところだが、量が多すぎるのだ。その代わり、カイドが力の限りを尽くして、結界を張はってくれていた。

彼がくつくくと、少々不気味な笑い声を立てる。

「これらの本を押収できると思うなよ。俺たちを追って捕まえるか、時間をかけて結界を解く

か……さあ、どっちにするだろうな？」

いろいろと仕返しのための罫も仕組んでおいたと言いながら、他にもいくつか仕掛けを施していた。

オーレリアンにも破れないような結界を張るのは、さすがに無理らしい。魔力量と技術が全く追いつかないとのこと。その分、複雑に魔力を絡ませて作ったと言っていた。

キヤルにはよく分らないが、カイド自身も解除するのが面倒な状態にはなったらしい。

「作りかけの薬も持ってたいい？」

「いいぞ。そこらへんも考えて空間をあけてある」

キヤルの製薬に使う道具や材料は、以前と同じようにカイドが魔法の空間に入れてくれるようだ。最近、新たに開発した痲漢撃退薬なども入れる。町の女性に配ろうと思って、多めに作っていたものだ。明日、配ってくる時間はあるだろうか。

ある人からは血圧の薬が欲しいと言われていたので、それも準備したのだけれど、主治医と話してからじゃなければ処方できない。

着替えなどをリュックに詰めたり、旅用のマントに薬草採集用の道具を詰めたりしながら、キヤルは一人で考える。

そうだ。効能などを書き出したメモと一緒に、八百屋のおじさんに預けておけばいい。それを巡回の医術士に見せてもらえば、処方してもいいかどうか分かるだろう。

良い考えだと思って、荷造りを終えてメモを作ろうとしたところで、キヤルはびくりと震える。

「カイドっ！」

マントを握りしめて、カイドのところまで走った。

それだけで、カイドには分かったのだろう。

「どこにいる？ 何人いるか分かるか？」

「今、街の入り口に着いた……十人……くらい？」

鼓動が速まって、正確な情報を把握できない。ふるふると、体全体が震えているのが分かる。

キヤルは『探索』のスキルで遠くの気配を探ることができるのだ。今まさにオーレリアンと部下たちが、ここへ向かってきていた。

「よし。それだけ分かれば充分だ。荷物はこれで最後だな？」

キヤルのリュックをポイッと空間に投げ入れて、カイドは彼女を抱き寄せる。

「俺がいるんだ。不安にならなくていい」

耳元でそっと囁き、額に軽くキスをしてくれた。

オーレリアンたちがすぐそこまで来ているというのに、そんな甘い態度を取られて、キヤルの頬が熱くなる。

体の震えは止まったが、こんなの恥ずかしくない。

カイドがキヤルを抱き寄せたまま、空を見上げて言う。

「……速いな。行くぞ」

カイドは玄関から外に出ると、保存魔法を展開させた。これなら家を長く空けることになっても、



今の状態を保つことができるだろう。

振り返ると、オーレリアンを筆頭に、十数人もの魔法使いがそこにいた。

全員が馬に乗り、キャルたちを取り囲むように並んでいる。

「はっははは！ 逃げようとしたか。やはりな！」

悪者のようなセリフを叫ぶオーレリアン。魔法使いのローブをなびかせる姿は、本当に魔王か何かのようだ。

「マジで倒してやるうかと思う」

ぼそつと言うカイドの気持ちは分かる。でもやめて欲しい。町が破壊される。

「僕からの通信をずっと待っていたのだろう？ しかし、君たちには直接会った方が良いと判断したんだ！ 感激に打ち震えてくれていいよ。この、僕に！ なんと王都からここまでご足労願えたのだからね！」

……自分でご足労とか言っちゃってるけど。

彼の言葉は、突っ込みどころだらけだ。話がもつと長くなるからやんないけど。

「随分早いお着きだったな」

カイドが顎を上げて、傲然とした態度を崩さずに言う。

オーレリアンと通信したのは二日前。あの直後に立出たとしても、キャルだったら半年はかかる道のりを、たった二日でやってきたということだ。

「よくぞ聞いてくれた！」

褒められたと思ったのか、オーレリアンが胸を張る。別に聞いてはいないのだが。

「この僕の魔法技術の賜物<sup>たまもの</sup>とでも言おうか。これほどの速さで、しかもこの人数で国を横断できる人間なんて、僕をおいて他には……」

「僕が頑張ったんですよう。オーレリアン様は、とりあえずスピード上げていただけでしょう？ その間の摩擦<sup>まさつ</sup>軽減<sup>くげん</sup>やら危険回避<sup>きけんくわい</sup>やら、疲労回復<sup>疲労回復</sup>まで！ ほとんど僕一人です……！」

オーレリアンの足元では、世話係のサシャが泣き崩れていた。到着してすぐに馬から降りて、地面に座り込んでいたようだ。

……相当疲れていそうだ。

周りの魔法使いたちは目をそらしている。オーレリアンの尻拭<sup>しりぬぐ</sup>いはサシャの役目なのだろう。

「サシャ、そんなことでは、この先やっていけないぞ！」

「もう、やっていけなくていいから、部署替えさせてくださいあい！」

ちよつと可哀想になる。

だけど、キヤルも周りの魔法使いの立場だったら……

「頑張れ」

と、言うしかない。サシャは目をそらされながらも、数人から励ましの言葉を頂戴<sup>ちやうたい</sup>していた。

そうだよ。お気に入りのサシャがいなくなったら、他の人に火の粉<sup>こな</sup>が飛んでくるもんね。

そんなことをやっている間に、キヤルたちの背後にある家から火が噴き出す。

「なっ……!? カイド、何をしているんだ！」

「証拠隠滅」

「ふざけるな！ 消せ！」

カイドの魔法によって、キヤルの家は勢いよく燃え出した。

オーレリアンの命令を受けて、サシャ以外の全員が消火活動を始める。

「本……本はっ!? カイド、あれらがどれだけ貴重なものか分かっているはずだろう！」

オーレリアンは余程<sup>よほど</sup>慌てているのか、珍しくしゃべりが短い。

「ああ。俺が個人的に興味がある本を中心に、ある程度は俺の空間に入れてあるから大丈夫だ」

「大丈夫なはずがないだろう!? アメンダ元医師士局長の著書は、全て貴重なものだ！」

カイドの飄々<sup>ひょうたつ</sup>とした態度に、オーレリアンは目をむいて叫ぶ。

「キヤルを傷つけるものから彼女を逃がすためなら、俺はなんでもやる」

カイドが真剣な表情で言った。さすがのオーレリアンも言い返すことはできなかったようで、

ぐつと言葉を詰まらせる。

うだ。Sランクのカイドが準備していた炎となると、魔法使いが数人がかりでもなかなか消せないよ

キヤルは、炎に包まれていく自分の家をぼんやりと見上げた。

オーレリアンがキヤルの方へ視線を向けて叫ぶ。

「アメンダ嬢！ 君からも何か言ってくれ。君を罪に問うつもりはないんだ。ただ、事情聴取をさせてもらいたい」

キヤルに言えば、カイドを止められると思っっているのだろう。オーレリアンとサシャまでもが消火に加わってしまえば、その間にカイドが逃げてしまうので、燃え盛る家を前にして、オーレリアンは動けずにいるようだ。

かといって、町に被害を出さずにカイドを捕まえることもできないらしい。オーレリアンの背後では、火事に驚いた人たちが家から飛び出してくるのが見えた。

近くの家が夜の闇に火の粉を散らしながら燃えているのだ。そりゃあ、出てくるに決まっている。心配そうにこちらを見つめる人たちに、キヤルは苦笑と共に首を横に振って、大丈夫だと伝えた。本当は、こんな大事にはしたくなかったのだけれど。

「私が罪に問われないって言うんだったら、いったい誰が罪に問われるんですか？」

キヤルの問いに、オーレリアンはまたも、ぐつと言葉に詰まる。

しかし、消火活動もむなしく家を呑み込んでしまった炎を見て、再び口を開く。

「理解してくれ。残念だが、君の母親は犯罪者なんだ」

オーレリアンは、いつもと違って早口で、直接的な物言いをした。

どんなものよりも、本が大切なのだ。彼にとつて、知識は何物にも代えがたい宝。

——母が、泥棒だと言った。

キヤルはもう、背後の家を振り返らない。眉間にしわを寄せ、口を引き結ぶ。

オーレリアンは、キヤルたちと家とを交互に見ながら慌てている。『こんなに説明しているのに、なぜ分からないんだ？』とこちらを責めているようだ。

キヤルの説得を諦めたのか、今度はカイドに話しかける。

「カイド、理解してくれ。彼女は容疑者のことを一番よく知っている人間だ。重要参考人として今まで一緒に来てもらいたい。こんなことくらいで、あの貴重な資料が燃えてしまうなんて……」

——こんなこと？

やはり彼にとつては、キヤルの家よりも、キヤル自身よりも、本が大切なのだ。

尊敬するアメンダ元医師士局長——キヤルの父が執筆した本を、とにかく欲しがっていた。

だから、キヤルを連行することを、そしてキヤルの母親が罪に問われることを、『こんなこと』などと表現する。

オーレリアンは、キヤルの怒りの表情にも気が付かない。炎を消してくれと、必死で訴えている。「キヤルの母親の窃盗容疑について捜査する気もないんだろ？ そんな状況で、犯罪者の娘としてキヤルを渡せと？」

カイドが剣を手にする。

それに対抗するように、オーレリアンも杖を掲げた。

しかし、戦うことはしたくないのだろう。

彼は言葉を重ねていく。カイドとキヤルの不快感が高まっていくような言葉を。

「……例の書物は、盗品だ。窃盗の事実をなくすことはできないよ。でも、アメンダ嬢は何も知らなかった。しっかりと保護し、丁重に扱うことを約束しよう！」

満面の笑みで腕を広げる彼を、カイドは睨み付ける。

「いやだね。『もてなす』だろう？　そこは。『扱う』と言っている時点で、渡す気はない」  
 オーレリアンが、舌打ちと共に杖をふるう。大きなシャボン玉のようなドーム型のものが、キャ  
 ルたちの頭の上から降ってきた。

カイドが何か呟くと、彼の剣が青白く発光する。魔力を纏った剣だ。

軽く気合いを入れるような声と共に、カイドが剣を振る。すると頭上のシャボン玉は、ぱあんと  
 可愛らしい音を立てて破裂した。

「この俺に、この程度の捕縛の術が効くと思うか？　ここに来るまでに、随分疲れてしまったよう  
 だな」

サシャはもう力が残っていないらしく、馬の足元に座り込んだまま青くなっている。

もちろん、ここまで飛ばしてきたオーレリアンだってそうだ。

「くそっ……！！　カイド！」

オーレリアンがもう一度杖を振り上げると同時に、キヤルは背後の魔法使いたちに向かって布  
 袋を投げつけた。

「なんっ……!?!」

動揺したのか、なんとも中途半端な光の輪が飛んでくる。カイドが鼻で笑いながら、オーレリア  
 ンから放たれたそれを叩き落とす。

そうやっていっているうちに、魔法使いたちのうめき声が聞こえてきた。

「ぐっ……？　ごほっ、ごほごほっ」

「がっ……はっ。なん……?」

キヤル特製の痴漢撃退薬だ。町の女性に配ろうと思っただ量に作ったものを、ほとんど全部投  
 げた。

宙に浮いた粉は、炎に吸い寄せられるように舞う。もちろん、魔法使いたちの目元や鼻先をしっ  
 かり通過してだ。

ちらりと様子を見ると、全員が地面に手をつけて、せき込んだり涙を流したりしている。

「アメンダ嬢！　何をするんだ！」

「母が持っていた本が、たとえ盗品だったとしても、何か理由があると思っています。調査もせず  
 に、母に窃盗の容疑をかける人とは、一緒に行けません」

そう言っ、キヤルは一步前に踏み出した。

「分かった！　調査を開始するから、アメンダ嬢！」

キヤルがオーレリアンの横を堂々と通り過ぎようとしているのが分かったのだろう。彼は慌てて、  
 行く手を阻む魔法の壁を出現させる。

この壁は、カイドの剣で斬れるだろうか。

そう思っ、キヤルが見上げた先で、カイドは大笑いしていた。

「そんなことしてる暇があるのか？　燃え尽きるぜ？」

消火活動している魔法使いは、もう一人もいない。皆、涙を流してうずくまっている。

「~~~~~っ！　覚えていろよ！」

オーレリアンは、キヤルの身柄と本を比べて、あっさりと本を取った。

目の前で消えていこうとする知識の山を見捨てることなどできないのだろう。

炎の方に魔力を向けたオーレリアンを見て、カイドはキヤルを抱き上げる。

「じゃあな」

軽い言葉をかけて、全速力で走り始めた。

オーレリアンが罵る声の聞こえたが、風に紛れてあつという間に聞こえなくなる。

山猿と戦った時にも、こうやって抱えて走ってもらったが、山の中と町中では全くスピードが違う。カイドがキヤルを落としたりするはずはないのだが、あまりの速さに目がぐるぐる回って、キヤルは彼の首に必死でしがみついた。

少しスピードが緩んだかなと思えば、周りはすでに草原。町はもう影も形も見えない。

キヤルは、カイドに強くしがみつきて、手足がブルブル震えていた。

下ろしてもらっても、すぐに歩き始めるのは無理だ。だから、カイドの腕の中でおとなしくしているしかない。

「いいなあ。思いつきりしがみつかれるのもいいし、こうやって寄りかかれるのもいい」

彼はご機嫌な様子でそんなことを言う。

ちよつとムカついたので、キヤルは力の入らない手を無理矢理動かし、髪の毛を引っ張っておいた。

「あいたたたつ！ 大丈夫だって。時々ちよつとやろうとは思ってるけど、そんなに頻繁にはし

な……痛いつて！」

「もう、二度としないのー！」

怒ったキヤルにちらりと視線を向けて、ふいつとそらすカイド。

——絶対またやる気だ。にやけた口元が証拠だ。

「炎のことだけど、あいつらが思ったより上手く消火してくれなくて、家が少し焦げたかもしれない。悪いな」

キヤルのムクれた顔を見無視して、カイドは話題を変えた。

「あ、うん。ちよつとびっくりした」

燃やすとは聞いていたけれど、炎に包まれるほどとは思わなかった。

しかし、家にはカイドが入念に保存魔法をかけている。外壁は多少焦げても、中には全く影響がないという。

オーレリアンには父の本も少し持ち出したようなことを匂わせたけれど、それも嘘だ。盗品疑惑のある本だけで、後は父の書斎の本棚に綺麗に並んだまま。

ただし、『捜査の参考資料』などと言って持っていかれないように、嚴重に結界を施していた。

「本が無傷だと分かれば、あいつはこつちを追ってくる」  
キヤルは声を出せずに小さく頷く。

これから、逃亡生活が始まる。

王宮の役人に追われるような立場になるなんて、想像したこともなかった。

カイドが抱き上げてくれているのをいいことに、彼の胸に顔をうずめる。不安が湧き上がってくるのを止められない。

彼は、からかうことなく抱く腕に力を込めた。

「さすがに、二日で国を横断するやつに見つけられたら、まずい」  
びくりと震えてしまったキヤルの肩を、カイドがなだめるように叩く。

「これくらい離れば、あいつの『探索』の範囲外だと思う」

そう言いながら、カイドは王都の方向へ走っていた足を、北へと向けた。

オーレリアンの『探索』の範囲内ではどこへ行っても無駄なので、とりあえず真っ直ぐに走ってきたらしい。この後は、どちらに向かったか分からないよう、攪乱するように動いていくという。

「……もう少し、広いんじゃない？」

キヤルでさえ、頑張ればもう少し範囲を広げられる。今みたいに不安で震えている状態でなければ、自分の家の周りに人が何人いるかくらいは分かるだろう。

けれど、カイドはキヤルを見下ろしてニヤリと笑う。

「いや、あいつが気配を追えるのは、このくらいだ。昔、あいつの依頼から逃げるためにいろいろ試したからな」

「……仲良しだな。大がかりな鬼ごっこでもしていたような言い方だ。」

「だがそのせいで、青い鳥で依頼を飛ばしてくるようになりやがった」

これが青い鳥の誕生秘話か。

なんだか、とつてもくだらない内容だった。

「キヤルのは、もっと広いだろ？」

「……今は、そんなに広げられないよ？」

普段から『探索』を展開してはいるけれど、そこまで広くはない。せいぜい目に見える範囲だけだ。それ以上に広げようとするなら、この不安な気持ちを落ち着かせなければ。

こうやってカイドと会話をしている間も、キヤルは彼に縋るように抱き付いていた。

「やらなくていい。こうしてくれているキヤルが可愛いからな」

その言葉と共に、彼の唇がキヤルの額に触れる。

キヤルが弱っているのでもやりたい放題だ。さすがに恥ずかしすぎる。

「とりあえず、魔法で探知されなきゃいいんだ。青い鳥は飛んでくるだろうけど、俺たちがどこにいるのか分かってないみたいだしな」

カイドは鼻歌でも歌いそうなほど機嫌よく歩いている。疲れた様子はない。無理に明るく振舞っているわけでもなさそうで、キヤルは少しほっとした。

自分が、カイドをひどい事態に巻き込んだことは理解している。盗難の……しかも、貴族が持っていた重要な書物の盗難の、重要参考人であるキヤルと逃亡するのだ。

だがそれが、どんな罪に問われることになるのか、キヤルには分からなかった。

カイドがゆっくりと一定のリズムで歩いているからか、キヤルは眠くなってきた。

それに気が付いたカイドが、眠ってもいいと言うように背中を撫でる。だからキヤルは、カイド



の胸に頭を預けたまま目を閉じた。



——その頃。

炎を消したオーレリアンは、以前とほぼ変わらぬ状態でそこにある家を見て、全てを悟っていた。「ああ、もう！ 強力な保存魔法が効いてるじゃないか！ 僕とされたことがっ」

カイドの態度で気が付くべきだった。彼がキヤルの大切な家を燃やすはずがないのだ。あまりに動転していて、本のこと以外に頭が回らなかった。

部下たちは未だにキヤルの痴漢撃退薬で苦しんでいる。彼らを、ひとまず家の中に入れてやらなければ。

家の中に……

「開かないっ！ くそっ……結界まで張ってるのかっ。……あああつ！ 面倒な重ねがけまでしてっ！」

数人でかかれば時間をかけずに外せる。

しかし、ここには苦しむ部下たちと、疲れ果てたサシャしかない。

ガクリと項垂れて、オーレリアンは後ろを振り返った。

町の人たちが、まだ心配そうにこちらを窺っている。彼らに頼んで、今日の宿泊場所を確保する

しかない。

だが、絶対自分では行きたくないと思い、サシャに目で合図をした。

サシャは泣きそうな顔をしながらも立ち上がる。

うむ。それでこそ従者だ。

それにしても……と、オーレリアンはカイドとキヤルが去った方角に視線を向ける。もう、彼らの気配を追うことはできない。

それでなくとも、二日で国を横断するという荒業を成し遂げて、非常に疲れている。

しかも称賛の声が少なくて結構不満だ。

「カイドの逃げ足と、アメンダ嬢の『探索』能力……厄介だな」

オーレリアンは舌打ちをして、空を睨み付ける。

とりあえず今は、サシャが宿泊場所を見つけて戻るのを待つしかなかった。

3

キヤルは空腹を感じて目を開ける。

そこは森の中で、野宿する時はいつもそうするように、カイドにくるまれていた。

見上げると、まだ寝ているカイドの顔がある。

空気が涼やかだ。もう少しで日の出という時間だろうか。

キヤルが身じろぎしても、カイドは起きる気配がない。

実は、キヤルは寝ているカイドがお気に入りだ。何をしても、恥ずかしくないから。

腕を伸ばしてカイドの頬ほほに触れてみる。少しだけ伸びたひげが、さらさらとした感触だ。

反応がないことに気をよくしたキヤルは、伸びをしてカイドの頬ほほに自分の頬ほほをくつつける。ちくちくしてちよつと痛いけれど、体もびったりとくつついて気持ちが良い。

キヤルは頬ほほずりしていた顔を……少し、ほんの少しだけずらして、彼の頬ほほにキスをする。

——一緒にいてくれてありがとう。

声を出すとさすがに起きてしまうから、心の中だけでお礼を言う。

「ん……？」

カイドが眉間みまげにしわを寄せた。

キヤルはパツと元の体勢に戻って寝たふりをする。

その動きで、カイドははつきりと覚醒かくせいしてしまった。

「あれ……？ 今、なんか……？」

寝惚ねぼけたような声が頭の上から聞こえる。

どうやらバレてはいないようだ。

よかった。あんなのがバレていたら、恥ずかしくてしばらくカイドの顔を見られない。

「キヤル？」

呼ばれたキヤルは、眠そうな表情を作って顔を上げる。

「はい？」

カイドは不思議そうな顔をしながら、首を傾げていた。

キヤルは平静を装まもうけれど、心臓はバクバクと大きな音を立てている。

「……いや、なんでもない。おはよう」

彼は何も気が付かなかったようだ。

ホツと胸を撫なで下ろして、キヤルは微笑む。

「おはよう」

カイドは満面の笑みを浮かべて、キヤルにキスをする。

なんだか、妙に機嫌が良いなど感じながらも、久しぶりに一緒に寝たからかなとキヤルは考えた。

『どうして機嫌が良いの？』なんて聞けないので、キヤルには想像することしかできない。その想像だけでも、自意識過剰な気がして恥ずかしいのだから。

一人で照れていたキヤルは、気が付いていなかった。

最近、寝たふりをしていればキヤルがすり寄ってくることに気が付いて、寝たふりが異常に上手くなった男が目の前にいることに。

「嬉うれしすぎて身動きしてしまったことが敗因しやういんだな」

そう呟つぶやくカイドは一人反省して、さらに上達していくのだった。